

「忠こそ物語」の人物と構造：継子物語の変容

余, 鴻燕
九州大学大学院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/2544113>

出版情報：語文研究. 126, pp.1-17, 2018-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



「忠こそ物語」の人物と構造

——継子物語の変容——

はじめに

『源氏物語』「蛩」巻に「継母の、腹汚き昔物語も多かるを」とあるように、平安時代には、数多くの継子物語が存在したらしい。その大部分が散逸したため、現在我々が目にするのはその一部でしかないが、中でも『住吉物語』や『落窪物語』などが代表的なものである。一方、『住吉物語』や『落窪物語』のような作品全体が一個のまとまった継子物語となっているもの以外に、継子物語が挿話として作品に織り込まれるようなものもある。『うつほ物語』の「忠こそ」巻がその好例である。「忠こそ」巻は右大臣橘千蔭の一人子である忠こそが、五歳の時に母に先立たれ、その後父千蔭が通うようになっ

た故左大臣の一条北の方からの二回にわたる奸計により、出家まで追い詰められたという、いわゆる「継子物語」的な話である。

「忠こそ」巻に関して、従来の研究は概ね二種に分けられる。一種類は人物造型研究であり、主に継母と見られる一条北の方の人物像の解明^(注1)に集中している。もう一種類は「忠こそ物語」と「仲忠物語^(注2)」との対比により、「忠こそ」巻の『うつほ物語』における位置付けを論じるものである^(注3)。これらの研究はまず「忠こそ」巻を継子物語として読み取った上で、忠こそその不幸な結末を継子いじめの結果と帰結させたり、孝子である仲忠との対照により遺言の持つ力を論じたりするものである。しかしながら、「忠こそ」巻を単純な継子物語として認識することが適切なのか、いわゆる忠こそに対する「継

余 鴻 燕

子いじめ」の実態はいかなるものかなど、細部にわたってまだ未解明な問題点があるように思われる。

そこで、本稿では、「忠こそ物語」のような「異色」の継子物語がいかなる展開を見せるか、また、典型的な継子物語^(注)と比べてどのような特異性を持つかなどを問題提起として意識しつつ、従来関心が向けられることの薄い、継子物語における父親像に注目し、「忠こそ物語」のような男性継子物語において、父親が果たす役割を確認した上で、「忠こそ」巻の裏側に潜在する意味を再考してみたい。

一、継子物語の系譜——実母存在の意義

『うつほ物語』『俊蔭』巻において、兼雅は北山のうつほで仲忠母子を見出し、二人を都に連れ戻そうとする。ところが、俊蔭女はそれを拒否し、自分だけこのままうつほに残りたいとの考えを示すと、兼雅は、

「親なき人は、身もいたづらになるものなり。『昔、千蔭のおとどの、ただ一人子を、継母に謀られて、今は音にも聞こえず』となむ言ふなる。」（俊蔭 五一頁）^(注)

と俊蔭女を説得した。この兼雅の発言に登場する「千蔭」の「一人子」が「忠こそ」巻の主人公忠こそである。兼雅の言葉

からも明らかであるように、忠こそ悲劇は実母の非在から引き起こされたものだとして理解されており、仲忠を同じ目に遭わせないためにも、母親である俊蔭女を共に都に連れ戻す必要があるのだ。

忠こそその父親は時の右大臣であり、母君は一世の源氏である。「玉光り輝きたる男」（一一一頁）として生まれた忠こそは、一人子であるがゆえに、父母の愛情に包まれて「撫で養」われる。

母君は「頂きの上を蓬萊の山になさむ」と『掌の内に黄金の大殿を造らむ』と言ふとも、忠こそが言わむことは違へじ」と養ふほどに、忠こそ五つになる年の三月に、母君、にわか隠れ給ひぬべし。（一一一頁）

忠こそが五歳になる年に、母君が急に病を患って、日に日に重篤な状態になる。最期を悟った母君は、忠こそのことを思うと、「この世を離れがたく思ふ」ものの、無念至極のまま他界した。死に際しては、千蔭以下のような遺言を残す。

「誰も誰も、親にはものしたまへど、小さき時は、女親のごとはあらぬものなり。よし、いかがはせむ。おのれに代はりて、腹汚なき人につきて、悪しき目見せ給ふな。腹汚なき人ありて、悪しきこと聞ゆる人ありとも、言はむ人の罪になし給へ。」（一二二頁）

忠こそはまだ五歳の幼い子供であり、子供の小さい時は「女親」、つまり母親こそが誰にも代われないほど大事な存在であることを力説した。この遺言は後の展開とも大きく関わってくるが、ここではまず母親の存在意義を確認しておきたい。

「忠こそ物語」だけでなく、他に「継子物語」と呼ばれるような物語の始まりも実母の死去が設定されている。その意図はもはや明白であり、継子物語の発生にはまず継子という「役」が必要不可欠であるため、物語は常に実母が亡くなり、父親が別の妻を迎えること（物語によっては通うこと）によって始まるパターンを持つ。言い換えれば、継子物語の構図において、実母の退場が要求されており、実母を「排除」してはじめて物語の発端が成り立つわけである。さらに、実母の退場に伴うのが「腹汚なき」継母の登場である。継母は実の子供でない継子を迫害し、継子たちは苦難の生活の中で、孤独な身の上を嘆くことになる。

君ひとり臥し寝も寝られぬままに、「母君、我を迎へたまへ」と、「わびし」と言ひつつ、

我に露あはれをかけばたちかへり共にを消えようきはなれなむ

心なぐさめに言ひがひなし。

『落窪物語』 卷之一 一二二頁

世の中心憂ければ、姫君は、「身を失ひ、しからずは、尼にもなりなん」と悲しみたまへども、心になかなわぬことなれば、ただ明け暮れ、「母宮、我を迎へとりたまへ。世にあるべき心地せず」と泣きたまへば、（後略）

『住吉物語』 上巻 七〇頁

「これにつけても、母のおはせましかば。あはれ、かくは」とて、涙も落しつべきけしきども、（後略）

『堤中納言物語』 「貝合」 四五〇頁

これらの用例からも分かるように、『落窪物語』『住吉物語』から、時代がやや下った「貝合」まで、ままたらぬ生活を送る「継子」たちは例外なく、実母を恋しく思い、「実母さえてくれれば、このような生活を送るはずがない」と空しく嘆いている。実母が健在であれば、無論母親の愛情に包まれて成長していくはずだったため、現在の自身の不幸はあたかも実母不在に由来するかのよう思われているのである。継子の不如意な境遇は、負の側面からも実母の存在意義を物語る。忠こそにとっても、母君の死去は大きな打撃であり、山伏となった後に偶然正頼と再会した際も、「年五つにて、女親の手まかり離れて、世の中に侍りしに、心憂くおぼえ侍りしかど、（略）」（春日詣 一四六頁）と自ら実母を亡くした悲しみを

語っている。

前述した通り、継子物語の発端は実母の非在と継母の登場により成立する。「忠こそ」巻においても、母君が亡くなった後、「継母」視される一条北の方が登場し、忠こそが「継子」の立場に立たされる。この点からして、「忠こそ」巻は継子物語の発端にかなり接近しているように見えるが、その中で忠こそが男子であることに注意を払いたい。落窪の姫君や住吉の姫君のように、従来の物語に登場する継子のほとんどが女子であり、いわゆる「シンデレラ型」の物語となるものだが、忠こそが男子であるがゆえに、それらとは異なる継子物語の展開が予想される。そのため、物語において継子の性別がどのようにに取り扱われるのか、「女子型」と「男子型」の位相差が物語にもたらす効果について考える必要性が浮上してくる。

二、継子の位相——「男子型」の特殊な展開

妻が亡くなった後、千蔭は新たな女性とも付き合わずに、忠こそを大切に養育する。そうした中、時の左大臣源忠経が亡くなり、その妻の一条北の方が千蔭に目を留め、好意を寄せてくる。今までたくさんの縁談を聞き流してきた千蔭は、無論年齢の離れた一条北の方を相手にするはずもなく、聞か

ぬふりをしていた。それに対して一条北の方は千蔭への愛に熱狂し、何度も便りを送っても応えてもらえなかったため、「恥見せ給ふな」と言い出した。その結果、千蔭は心ならずも一条に通うようになり、願いがかなった一条北の方は財産を尽くして千蔭を歓待する。

夏・冬の御装束、朝・夕さりの御ものに多くものを尽くして、頭より足末までに、綾、錦を裁ち切りて、見給はせむ草木まで着せ飾らむ、このおとどに仕まつらむ、上下の、草刈、牛飼まであき満たせてあらせむ、(中略)この北の方は、出で来そふものではなくて、御櫛笥の物、さては田畑売り尽くして、数知らず使ひ給へば、限りなき財といへど、貧しくなりぬ。(一一四—一一五頁)

冷淡な千蔭に対し、一条北の方は恋に熱中し、千蔭だけでなく、仕える者たちにも衣食を満足するほど与えている。曾て「財の王」であっただけのこともあり、千蔭との付き合いのなかで財産に物を言わせてきた一条北の方であるが、財を尽くしたことで一層千蔭の冷遇を招いた。その頃、忠こそは立派な殿上童として成長し、故忠経の姪であるあこ君との付き合いで一条に出入りする。一条北の方は忠こそにも関心を寄せ、歌を送るが、忠こそに拒絶される。

作中に「腹汚き人ありて」(一一二頁、忠こそ母君の遺言)

や「継母の北の方」(一一八頁)という表現が明確に用いられているように、一条北の方は「継母」として位置づけられ、忠こそその人生を変えたことも事実である。忠こそその母君が亡くなった後も、千蔭は以前と変わらずに忠こそを最愛の息子として可愛がっている。また、忠こそはその聡明さから帝寵が厚く、「忠こそが世なり」とされるほど順風満帆の人生を歩んでいた。つまり、母君が亡くなったとはいえ、忠こそは何不自由なく立派に成長し、「時の者」にまでなっていることから、実母の死はショックではあったものの、忠こそその身の上に本質的な変化をもたらす効果は持ち得なかったと言えよう。こうして物語は、継母の「存在感」を強調することで「継子いじめ」的な雰囲気醸成し、物語の基調を定めた。

平安朝の継子物語を考える際、我々の頭にまず浮かんでくるのは、ある実母を失った姫君が継母から虐めを受け、苦難の末に貴公子により救出され、結婚して幸せな生活を送るというパターンの物語であろう。^(注7)これらの物語の主人公が女子と設定されるのは、後に貴公子の手による救出や結婚などの筋書きが待ち受けるからである。ところが、男子の継子である「忠こそ物語」においては、他者との結婚による救出と栄達が実現不可能なものとなり、物語はほかの道を模索せねばならなくなる。

このような男子型の継子物語の生成について、早くに池田恭子氏による考察がある。氏によれば、継子物語の語種は古代日本の社会環境および婚姻関係から生まれたものではなく、外国からの影響、具体的に言えば中国からの影響だと考えられる。^(注8)さらに、三木雅博氏は継子を女子と男子に区別し、それぞれ「シンデレラ型」と「漢族型」と名付けた上で、この「漢族型」、つまり男子の継子を主人公とする発想は中国の『孝子伝』^(注9)のような書物に由来するものと指摘した。果たして「漢族型」と名付けるのが適切か否かの問題はあっても、『孝子伝』における継子故事の主人公が全て男子であることには注目すべきである。

『孝子伝』は中国の孝子故事を収録したものであり、儒家の第一の徳目である「孝」を称賛して人々に孝心を呼び起こさせるための書物である。全篇四十五話のうち、継子物語となるのは一番の舜譚、三十二番の魯義士譚、三十三番の閔子騫譚、三十四番の蔣詡譚と三十五番の伯奇譚の五話である。これらの継子故事はみな男子の継子を取り上げ、しかも継子が迫害を受ける引き金として、継母に実子が生まれたことが共通して書かれている。その原因としては中国の家庭制度が根底にあると考えられる。家督制度がある中国においては、原則上嫡男が家の後継となり、家の管理権と財産の大部分も嫡

男に譲られることになる。嫡子がいる限り、継母の実子が家督を継ぐ可能性は極めて低いと想定されるため、継母は継子である嫡子を迫害し、実子の妨げとなる者を排除しようとする。この点に関しては『顔氏家訓』^(注1)にも明確な記述がある。

凡庸の性、後夫は多く前夫の孤を寵し、後妻は必ず前妻の子を虐す。唯だ婦人嫉妬の情を懷くのみ、丈夫が沈惑の癖を有することに非らず、亦事勢これをして然らしむるなり。前夫の孤は敢えて我が子と家を争はず、提携鞠養し、積習して愛を生ず。故にこれを寵す。前妻の子は毎に己れの生の上に居り、宦学婚嫁、妨げを為さざる莫し。故にこれを虐す。『顔氏家訓』卷上 後娶篇^(注2)第四

つまり、継子いじめは単なる継母の嫉妬によるものではなく、より切実な事情が含まれていると思われる。古代中国の家督制度の下、仮に自分の子供が家督になり損なう場合、家の財産分配や地位などが不穏なものとなるに止まらず、継母から見れば、家から追い出される可能性すら出てくる。これだけ危うい立場に立たされる継母は前妻の子供を迫害し、我が子のために邪魔者を取り除こうとすることで「継子いじめ」が発生したのである。この「いじめ」の背後には、家の主導権にまつわる争いと母親たる者の切ない思いが秘められており、中国において流布する継子物語の大部分が男子型である

ことも、この家督制度の存在が原因だと推測されよう。

一方、家督制度が確立していない平安時代において、継子いじめの理由をどう考えるべきなのか。「女子型」の継子物語が多く語られる中で、「腹汚なき」継母のいじめは単なる嫉妬によるものであるのか。『住吉物語』における継母は姫君が四位の少将と文通を行なっていることを聞き、自分の娘のほうがよりふさわしいと考え、計略で実子の三の君の婿を迎えた。『落窪物語』も同様、継母が落窪の君のところに通うのが相当の身分の貴公子だと覗き見て、その結婚の妨害を謀った。平安朝の姫君たちにとつて、良い結婚相手を見つけることは生涯の幸せに関わる大事である。それを考えると、継母の行動が「腹汚なき」という一語では解釈し切れず、その深層には実子の幸せを最優先に考える複雑な心情が存在することも見逃してはならない。『孝子伝』の「男子型」継子故事にせよ、『落窪』『住吉』の「女子型」にせよ、それぞれの社会環境と家庭制度を異にしつつも、継母の切実な思いは共通するよう思われる。

再び「忠こそ」物語に戻ると、忠こそは男子ではあるものの、家の主導権争いの問題がないゆえに、『孝子伝』の継子故事全般を借用することは困難である。また、一条北の方にも実子に関する記述がなく、その上正式に千蔭の妻として迎え

られていない点など、平安時代の「女子型」継子物語とも『孝子伝』の継子物語とも異なる設定を持つている。三木氏は、『継子虐め』は、男性が子供の小さい時にすぐに再婚し、複数の妻を持つところから起こされるものである」と指摘した^(注13)が、その説が成立するには、先述した父親の再婚と継母の實子の存在が必要条件となる。千蔭が一条北の方と再婚もせず、一条北の方にも実子がない以上、忠こそへの迫害は実子の幸せへの配慮から生じたものではないはずである。ならば、『継母』たる一条北の方の「いじめ」は如何に発生したのか、二回にわたる悪略は何を意味するのか。これらの疑問点を解明することは、『忠こそ物語』を理解するにあたつて有効なアプローチにもなるだろう。

三、虐めに秘められた真意——待つ女性の虚しさ

千蔭は一条北の方との不釣り合いな関係に積極的になれず、次に引くように、「一条というところはものまでがまずい」と嫌悪感すら漏らしている。

おとど、「あやしう、ものこそ食はるれ。かの一条は、口こそ悪しくなれ」。忠こそ「さるは、かしこにこそ、よき物は侍らめ」と申したまへば、おとど、『玉の台^(注14)』と

言ふは、それぞかし」とのたまひて、（後略）（一一七頁）それに反して、一条北の方は千蔭に熱中し、箏の琴、琵琶などを演奏して千蔭を喜ばせるつもりだが、このような「風流」なことも千蔭にとってはただの騒音に過ぎず、形だけの「玉の台」では空しいばかりである。その後千蔭は宮仕えに追われていることを言い訳に、長い間一条殿を訪れないでいる。千蔭に冷遇されるにも関わらず、一条北の方は心細くその来訪をひたすら待ち続けていた。

こうした思いが報われない一条北の方の前に現れたのが、立派な殿上童として成長した忠こそである。二人の接点となるのが忠こそと故忠経の姪あこ君の恋である。忠こそはあこ君に通うため、一条殿に出入りすることがある。そこで一条北の方は忠こそを千蔭の「御代はりに」（一一六頁、一一八頁）と思つて言い寄るが、忠こそは知らない顔をして誤魔化した。五月五日に一条北の方は訪ねてきた忠こそに再び歌を送り、忠こそは父のことを配慮して、一条北の方の好意を拒絶し、「寄る波のすぎわたればあやめ草なほ思ふこそ苦しかりけれ」（一一八頁）との返歌を送る。ところが、この返歌が一条北の方の逆鱗に触れ、「われに恥見すること。いかでかれが報いせむ」（一一八頁）と報復の念を抱き、悪略をめぐらしはじめる。ここで問題となるのは忠こそへの報復である。

物語の展開としては、「寄る波」の意味を誤解し恥ずかしめを感じたため、忠こそに報復することになったのだが、どうもこの歌だけではいじめの理由として不十分との感を払拭しきれない。この疑問を解くためには、まず一条北の方の人物造型から考える必要がある。

結論から言えば、一条北の方は過剰なまでに「恥」を意識する人物なのである。「五十余ばかり」（一一三頁）の一条北の方が「三十あまり」の千蔭に懸想することについて、柳瀬氏は『宇津保物語』の一条北の方の恋物語には（中略）〈行動する女〉と〈拒む男〉という関係が成り立っている。つまり、一条北の方の〈好色な姫〉としての造形は、〈行動する女〉として捉えられる^{（注15）}と解釈している。一条北の方は自身の年齢を意識しつつも、「恥を捨て、言い出でむ」（一二三頁）と積極的に行動し、最終的には「恥を見せ給ふな」との殺し文句で千蔭を落した。一条北の方の猛烈な懸想に屈した千蔭にとって、交際は相手の「恥」意識に応える「情け」に過ぎない。その後財産を尽くして貧しくなった一条北の方に、千蔭は宮仕えを口実に、長い間通つて来なくなる。にも関わらず、一条北の方は一途に待ち続け、繰り返し「仏神に大願を立て」て千蔭の来訪を願う。そのことについて、柳氏に「物語では現実的な側面から老女が財を尽くしてまで恋を成し遂

げようとする、滑稽な〈行動する女〉としての一条北の方の姿が強調されている^{（注16）}との指摘がある。確かに最初の段階では女の身から男性に言い寄って、行き過ぎなくらいに相手を歓待するところから、一条北の方の積極的な行動力が鮮明に描き出される一方、千蔭との付き合いの中で次第に受身の立場になり、千蔭の来訪を待つしかできないという、「待つ女」へと変容したことも看過できない。「この北の方、思ひ焦られて、湯水も参らず、わびしげに待ちわたり給へど、御文をだに聞こえて、月ごろになりぬ。北の方、待ちわづらひ、すべながりて、かく聞こえ給ふ。」（一一六頁）とあるように、千蔭の来訪を一途に待つ女性という側面があらわになる。このように、一条北の方の人物造型を考える際には、「行動する女」から「待つ女」への変容過程を全体的に捉えたほうが妥当であろう。

散々待たされた一条北の方は、冷淡な千蔭に対する「恨み」も募る一方である。「恨み聞こえ給ふ」「月ごろのつらさを恨みなどし給ひて」（一一七頁）などと、繰り返し千蔭に対する「恨み」への言及があり、千蔭との関係に失望した一条北の方はいかに忠こそにも関心を寄せる。「好色な老女」として造型されるため、親子に対する同時の恋と思われがちだが、忠こそに対する態度のなかで、「かの御代はりに」との表現が二回

も出たことに留意する必要がある。ここでの「御代はり」は他の誰でもなく、千蔭である。忠こそは千蔭の実の息子であり、父親の「代わり」としては最適である。このような忠こそへの好意は、親子ともに向けられた恋情というよりも、あくまでも千蔭の「代わり」であることを物語っているように思える。しかし、忠こそにとっては継母であり、「おとどに『悪し』と思はせ奉らむ」(一一八頁)と父親に配慮して一条北の方の好意を断る。千蔭の冷遇に加え、忠こそにも拒絶された一条北の方の「恥」意識は一層高まり、ついに千蔭親子の関係を裂く悪略を立てるに至ったのではないかと考えられる。

一条北の方による悪略は二回行われた。一回目は千蔭が一条殿に置き忘れていた大切な石帯を隠して、忠こそに盗まれたと偽るという、「石帯紛失事件」である。一条北の方は協力者の博打を呼んで、芝居の後半を演じさせた。

「せめて問はるるものならば、人に聞かせずして、おとどに、『忠君のせさせたまふなり。おのれがすることにあらず』といひて」 (一一九頁)

博打には、忠こそが盗んで売ったように言わせ、傍線部に注目してみると、「他の人に聞かせずに、千蔭の大臣にだけこう言え」との指示を下した一条北の方の目的は、千蔭を悩ま

せることにほかならない。

一回目の悪略が思惑通りにはいかず、一条北の方は二回目の奸計をめぐらす。今回は故忠経の甥である祐宗を呼び出して、祐宗の口から忠こそが父を謀反の罪に陥れようとしているとする讒言を千蔭に伝えさせる悪略である。その際、一条北の方は祐宗に忠こそが継母に「邪恋」を抱いていると虚言を言う。

「あさましきこと、忠こそ、いかなることかありけむ、あさましき心つきて、夜昼言へば、見知らぬやうにて侍れば、思ひ狂ひて、『おほかたは、父おとどのいますぐればぞ、かく侮り給ふ。いますぐらずは、何か慎まむ。この道には、親子なきものなり。このおとど、帝傾け奉らむ』と奏して、流させ奉りて、慎むことなくて、責め言はむ」となむ言ひたばかるなる。これなむ、おのが身に苦しきことなる。『かかることなむある』と、かしこに語らむ』と思へど、かかる仲らひを、昔より、腹汚なきものに、人の言へば、あぢきなくてなむ、えものせぬ。君やは、忠こそが帝にかう奏したるやうに告げたまはぬ。」 (一二二頁)

およそ事実と反する説得の文言である。自分から忠こそに言い寄ったにも関わらず、一条北の方があえて継母と継子の

間の邪恋を持ち出したのは、忠こそが「言ひつくべきこともなし」(一一八頁)とされるような、欠点のない人物であるほかに、当時の社会通念としても、継母と継子の間の恋は許されないものであり、ましてやそのために実の父親を陥れようとはけしからぬことだという認識を持っているからに違いない。これはまるで一条北の方自身の「非」を暴露するかのような「自虐」的言説である。一条北の方の迷惑通りに祐宗が讒言し、事の重大さもあり、千蔭はかなり動揺した様子である。石帯紛失の件ですでに懷疑の種を蒔かれていた千蔭は、謀反の讒言を聞いて落胆し、一時休暇を取って帰宅した忠こそにつれない態度を取り、冷酷な言葉をかけた。当の忠こそは悪略に関して全く知らず、父親の態度に困惑した挙句出家を決意する。

一条北の方の一連の悪略は表面上忠こそに対する迫害であるように見えるが、千蔭をこの構図の中に入れて考えると、一条北の方は千蔭との年齢の差を意識し、それゆえ「恥」への敏感度も人並みではないはずである。しかも相手は冷淡であり、千蔭を待っている間に、一条北の方の胸中には愛のほかに、恥と恨みの種も芽生えた。失望した一条北の方は標的を変え、その息子の忠こそに目をつけるが、また拒絶されてしまい、しかもその理由は父千蔭への配慮である。つまり、

一条北の方の忠こそへのいじめは、単に忠こそその返歌への誤解から生じたものではなく、その深層にあるのは実は冷淡な千蔭への恨みの現れであり、かの忠こそその返歌は長年累積した恨みと無念の一つの爆発口に過ぎないように思われる。この点は、奸計が露見したにも関わらず、一条北の方が相変わらず千蔭の来訪を期待する行動からも裏付けられる。

かく、思ほし嘆きつつ経給ふほどに、かの一条北の方、思ほし嘆くこと劣らず、「今や、今や」と待ちわたり給ふに、おとどおはしまさねば、御座を打ち払ひて臥し給ふに、御前の花薄の折れ返りて招くを見給ひて、北の方、

待つ人の袖かと思れば花薄身のあき風に靡くなりけり
などのたまひわたるに、(後略) (一一三二頁)

忠こそその出家に気が咎めるような様子も一切なく、千蔭が通つてこないことを嘆き、「待つ人」と自称する一条北の方。このいじめの裏側に秘められた思惑は「待つ女」の一種の復讐であり、いわゆる「継子いじめ」の部分に当たる忠こそへの迫害は、千蔭への恨みの変容でもある。しかし、こうした復讐は千蔭のさらなる冷遇を招くほかに効果がなく、無力で徒勞であると言わざるを得ない。

従来の継子物語においても、父親の「無力」さが目立つと言われている^(注17)。だが「忠こそ物語」には、父親の関与という問題

が「いじめ」の真意を解明する過程の中で次第に浮かび上がるため、父親像の把握も物語全体を理解する上での重要な手掛かりとなってくる。

四、「情け」の二面性——表裏相異の父親像

「情け」という表現が何回も用いられるように、「忠こそ物語」において、千蔭は「情け深い」人物として造型されている。妻が世を去った後、千蔭に関心を持って言い寄ってきた人も数多くいたが、千蔭は妻の遺言を守って、これらの縁談を聞き流して、忠こそだけを頼りにして大切に育てた。

忠こそを、妻にもかたへ、子にもかたへと頼み思して、撫で養ひ給ふほどに、世の中にありとある上達部・親王たち、女子持ち給へるは、女方より、「名高き大臣にものし給へば」とて、降る雨のごとに言ひ来れど、女君のたまひし言を思して、聞き過ぐし給ふに、(後略)

(一一二頁)

ところが、結局なぜ年齢の離れた「よきほどなる親子ばかり」(一二三頁)の一条北の方と付き合うようになったかと言うと、「情け」への固執が要因だと考えられる。一条北の方が猛烈に言い寄ってきたため、聞き流してはあまりにも「情け」

がなく、相手の恥にもなると考えた千蔭は一条殿に通い始めた。千蔭にとっては本心からの行動ではなく、「財の王」である一条北の方も良き相手とは言い難いが、「情け」のない人だと思われたくないゆえに、一条北の方に「同情」して、とうとう彼女の願うように行動しただけだ。『伊勢物語』「つくも髪」のくだりや、『源氏物語』において女性遍歴が豊富な光源氏が源典侍や末摘花とも付き合っていたことなどを考え合わせると、相手を選ばず、情けをもつて対応することは男性の美質の一面であるようにも考えられる。不本意でありながらも、年上の女性の切ない懇願を断れず、一条北の方との関係を幾年間も維持することが、千蔭からしては「情け」のつもりでいたに違いない。この「同情」から始まった付き合いも到底長く続かず、千蔭は次第に一条北の方を疎んで、通わなくなったのである。

千蔭のつれなさに対して、一条北の方も「行動」せずにはられない。千蔭に手紙を送り、「いみじき恥をも見給へつるかな」(一一六頁)と訴えた甲斐があつて、千蔭は相手の「恥」に配慮し、再び一条を訪ねた。

おとど、いとほしがりて、「かくのたまふを今宵ばかりはまうでむかし」と思して、その夜さり、一条にものし給ひて、下りて入り給ふまでは、「なほ絶え給はじ」と

思す。

(二一六頁)

千蔭のこうした「きまぐれ」な来訪が、待ち遠しかった一条北の方にとつても大きな喜びであり、胸中を訴えたり、女房がらみで夢語り^(注18)をしたりして千蔭を引き留めようとするが、千蔭は口実を作つて急いで一条殿を離れた。このような矛盾した感情に苛まれる中でも、千蔭は一条北の方と縁を切ることでできなかった。最終的に一条北の方の悪略が露見した際にも、千蔭は相手を非難することなく、ただ一条と一切関わらないようにした。一条北の方は自分のしたことに臆面もなく、千蔭の来訪がないことを恨み、とうとう千蔭との関係を断念し、以前交わした手紙も返却したのである。最愛の息子を隔れて出家にまで追い詰めた一条北の方に対して、千蔭にも無論考えがあるが、しかし返信の中では全く言及せず、以前と変わらず淡淡とした調子だった。

「ここにこそ忠が上に、よろづにいみじきことをものし給ひけるに、恨み申さまほしく」とのたまひけれど、情けづい給へる人にて、(後略) (二二一頁)

ほかの継子物語における継母(もしくは悪略者)に対する復讐と比較してみると、千蔭の「情け」がより明白なものであろう。千蔭の「情け」深さはこれだけではない。石帯紛失の件では、告げ口をした博打をたやすく許し、その上「絹三十疋」を賜つ

た。千蔭のこの処理の仕方は二回目の奸計へと繋がっていき、祐宗にもさらなる事実確認をせず、その上関係者の忠こそにも何も伝えていない。忠こそその母君が臨終の時「腹汚なき人ありて、悪しきこと聞ゆる人ありとも、言はむ人の罪になし給へ」(二二二頁)との遺言を残したことを考えると、千蔭のこうした一連の処理法は、遺言への違反としかほかに言い様がない。

このように「情け」に執着してきた千蔭だが、その裏側には「非情」な一面も窺える。まずは一条北の方に対する態度である。元から相手にしていなかったゆえ、千蔭は通うことに気が進まなく、たまに行つたとしてもあつてなく帰宅してしまう。こうした千蔭を相手に、一条北の方もただ心細そうにその来訪を待ち、「ものしたまはぬことを思ひ焦られて、大願を立つ。陰陽師・巫を召し集めて、せぬわざわぎをし給へど、しるしなし」(二三〇頁)とあるように、一条北の方にとつて最大の願望は千蔭の来訪だが、相手の千蔭は終始冷淡な態度を崩さない。待ち倦んだ一条北の方から恨みの手紙が届いて、千蔭は止むを得ず訪問しても、また急いで去つてしまふが、かといつて一条北の方と縁を切ることはしなかった。千蔭と一条北の方との関係はずつとこの繰り返しであり、言葉を換えれば、一条北の方を生殺しにするに等しい。余儀なく「待つ女」となった一条北の方からしても、千蔭はつねな

くて薄情な人にしか思われていないが、千蔭自身にはその自覚がなく、最後に一条北の方から恨みめいた手紙が届いても、「気色もなく、かく恨み給ふかな」(一二三頁)と、なぜ一条北の方がこれほど不満を抱いているのか不可解な様子でいる。

千蔭の「非情」な一面は忠こそに対する態度にも現れている。千蔭が忠こそを最愛の息子と見なすことには疑いの余地がないが、ただし、最終的に忠こそを追い詰めたのはほかの誰でもなく、千蔭自身であることも念頭に置きたい。石帯紛失の件で息子忠こそその悪口を聞いて、「あやしく、あらじ」と思いつつも、忠こそには確認せず、当の忠こそは自分の身の上に災いが降りかかることも知らずに、二回目の悪略に陥っていく。この石帯の件は、元はと言えば千蔭の不注意によるものであり、これほど大事な家の宝をきちんと納めず、一条殿に置き忘れたからこそ、一条北の方の悪略に利用されるわけである。しかも石帯は一条殿で失くしたものであり、最初に懷疑の目を向けるべき人物は無論一条北の方のはずだったが、千蔭は奸計を見破ることができず、虚言に動揺する。二回目に祐宗の虚言を聞いて、「世を逆さまになさむと言ふとも、心にかなふものならば、任せてみむ」(一二四頁)と言いながらも、胸中の疑念が消えぬ千蔭は疑心暗鬼になり、帝に召されても参内を躊躇する。ここでは再度この忠こそを「庇

う」言葉を考えてみよう。「ただ今とて、兵ども来て、『千蔭を殺さむ』と言ふとも、かれが咎をば、えなむのたまふまじき。」(一二四頁)と反応した千蔭はすでに讒言に心を惑わされていたことを暗示する。忠こそを信じきれなかった千蔭は自分の息子の「したこと」であれば、たとえ身を滅ぼすような重罪であっても、父親としては受け入れるほかないと親子愛を表明している。しかし問題の次元は違うはずであり、謀反の「結果」をいかに受け入れるかより前に、事態の真偽を判断する方が重要だった。

千蔭の忠こそに対する信頼の薄さは、帝の対処との対比で一層浮き彫りになる。忠こそが長い間宮仕えに戻らないことを受けて、帝の召しで参内した千蔭は、はじめて忠こそその失踪を意識した。忠こそ失踪の原因を探る際に、まだ事情を知らされていない帝は、失踪が「思ひ鬱じ」によるものだと推断し、また、その苦悩は父親の千蔭の態度に関与していると看破する。事実もまさにその通りである。その後千蔭から一連の事件の経緯を聞いた帝は、か的一条北の方の仕業ではないかと直ちに事実を見抜き、昔から評判の良くない人物だったと千蔭に忠告を与える。虚言を信じ込んで我が子を疑う千蔭を前にして、帝はこう言う。

「人の上にだにいふことなかりし人なり。いはむや、さら

に、親の上にはいひてむや。心を知らむ人は、さる逆さまのことをいふとも、『まこと』と思ほしなむや。」

(一二〇頁)

「人の悪口さえ言つたことのない忠こそが、実の親を陥れるようなことを言うはずがない。もし忠こそその本性を知つていれば、告げ口されてもそれを信じるなどあり得ないことだ」との帝の発言は、千蔭にとつてあまりにも痛烈な一撃であり、息子たる忠こそその「心」を了解していない現実を容赦無く暴露した。父親である千蔭の忠こそへの信頼は、余所の人以下のものではあつた。今更ながら千蔭ははじめて疑いの目を一条北の方に向け、そのような「けしからぬところに通ひ行」くことを後悔するばかりである。このように、千蔭の忠こそに對する不信感が事態を望ましくない方向へと加速させる一方であり、その意味では、一条北の方のめぐらした千蔭父子の關係を裂く奸計が「成功」したと言わざるを得ない。

事の真相を知つた千蔭は亡妻の遺言を守れなかつたことを悲嘆する。ところが、千蔭は果たしてその遺言の意味を理解していただろうか。忠こそ出奔の直接の原因は千蔭の「許さぬ」態度であり、忠こそ自身が奸計に關して全く関知しないため、父親のこうした態度には困惑するほかない。「天を逆さまになすとも、伴の兵して、親を射るとも、汝が咎とは咎

めじ」(一二五頁)と言つていた父親が、一体何を耳にしてこれほど冷淡な態度を示したのか思い当たらず、自分の部屋に閉じ籠つてしまふ。無論、父親にその理由を問わなかつた忠こそその対処に全く問題がないとはいひ難いが、互いに打ち明けることのできない父子の間の溝は、拡大する一方である。千蔭は「情け深い」人物であることに甘んじて、遺言を守り続けてきたつもりだが、事実上その肝心な部分を理解できておらず、遺言を一面的にしか考へていなかったように思われる。女性との付き合ひを断ち、「腹汚なき人」を妻として迎へないことが遺言の実行に当たると独りよがりしていた千蔭は、結局一条北の方の悪略に欺かれ、最愛の息子を失つてしまふ。遺言に「悪しきこと聞ゆる人ありとも、言はむ人の罪になし給へ」(一二二頁)とあるのは、忠こそへの全幅の信頼を求めたものだが、千蔭は遺言の本質を把握できず、忠こそへの信頼を貫かなかつたため、結果として家の崩壊を招來した。

儒家は家庭内における親子關係の理想を「父慈子孝」とまとめるが、『顔氏家訓』が言うには、父親たる者の「慈」と子たる者の「孝」との間に相互關連があり、親子關係の中で上位者が主導権を持ち、家庭の調和を担う役目が強調されている。^(注22)「忠こそ」巻で描かれた悲劇は、千蔭の悪略者に対する「情け」と忠こそに對する「非情」により招かれたものであり、それに関

連して、忠こそも千蔭の悶死によって不孝の罪を背負わねばならない身となつてしまい、「父慈子孝」の理想には到底達し得なかったのである。

おわりに

従来、「忠こそ」物語は、継母の悪略による「継子いじめ」の物語だと受け止められていた。しかし今回の考察を通して、一条北の方の悪略に秘められた真意は、実は「冷淡」な千蔭への一種の復讐だったことが明らかになった。忠こそを出家にまで追い詰めた直接の原因が父親の冷酷な態度であったことも考慮すると、継子物語においてあまり重要視されていなかった父親が、実は大きな役割を果たしていることが分かる。

「誤解」と「思い違い」の物語だと読まれてきた「忠こそ物語」だが、継母の奸計を巡る千蔭の対処こそが、この物語を展開させる重要な力であったと考えられる。また、この物語を解体してみると、「忠こそ物語」は表面上継子物語の「衣」を纏いながらも、その裏では人間関係の難しさや信頼の大切さを物語っているようにも思われる。本稿では、継子物語の構図の中で、父親である千蔭が主導的な役割を果たし、一条北の方と忠こそとを結ぶ重要な存在であることを確認した上

で、「変容」した継子物語の実態を明らかにしようとして試みた。そのほか、「忠こそ物語」を「家の物語」として読む可能性や「忠こそ」巻が長編物語内において果たす機能等に関して、また稿を改めて論じたい。

注

注1 大井田晴彦「一条北の方の造型——『うつほ物語』作中人物覚書」(『物語研究会会報』第二十六号、一九九五年八月)、斎藤

正志「うつほ物語の言葉と作用——『一条北の方の恋物語』としての第三巻「忠こそ」(『源氏物語と日本文学研究の現在』フェリス学院大学、二〇〇四年三月)等。

注2 主に仲忠が「俊蔭」巻で母親に孝養し、のちに北山から父親の兼雅に連れ戻されて琴の才能を発揮して一族を栄達の道に導く物語を指す。

注3 長編物語の視点から論じる研究として、室伏信助「うつほ物語の構造——忠こそ物語の位置付け」(『王朝物語史の研究』所収、角川書店、一九九五年)、三上 満「忠こそ物語の意義について」(『日本文学』三四、一九八五年九月)、大井田晴彦「忠こそ物語の位相——『うつほ物語』の論理」(『国語と国文学』七二・一〇、一九九五年十月、山本登朗「親と子——宇津保物語の方法」(『森重敏先生喜寿記念 ことばとことのは』和泉書院、一九九九年三月) などがある。

注4 遺言を最後まで守りきれなかったがゆえに俊蔭一族と異なる結末を迎えたとの考えを主張する論として、例えば三上満「忠こそ物語の意義について」(注3) がある。

注 5

継子物語の展開について、市古貞次は中世継子物の十五の作品全部にわたって筋書の対照表を作り、一、母の死と継母、二、愛人、婚約者、三、継母の迫害、四、姫の苦難・救助、五、母の霊の加護、六、姫の動静、七、男の苦心、八、神仏の加護、九、再会（結婚）、十、賞罰・応報の十項目を掲げられる。（『中世小説の研究』東京大学出版会、一九五五年）それを受けて日向一雅は継子譚の理念型を迫害・流離・霊験と救出・結婚（繁栄）とより簡潔にまとめた。（『源氏物語の主題「家」の遺志と宿世の物語の構造』桜楓社、一九八三年）

注 6

特に断りのない限り、『うつほ物語』本文の引用は室城秀之校注『うつほ物語 全』（おうふう、一九九五年）に拠る。他作品の引用は全て新編日本文学全集に拠った。

注 7

前掲注5参照。

注 8

池田恭子「継子物語研究——継子物語の誕生に関する一仮説——」（『日本文学』四十、一九七三年十一月）

注 9

漢代から編集された雑伝類。劉向『孝子伝』、蕭広済『孝子伝』など十近くあるが、いずれも散逸。現存完本は陽明文庫所蔵の陽明本と京都大学付属図書館蔵（旧清原家所蔵）の船橋本のみである。

注 10

三木雅博「継子いじめ」の物語と中国文学——『うつほ』忠こそ・落窪・住吉の成立を考えるために（『国文学 解釈と教材の研究』五十一・四、二〇〇五年四月）

中国北齊の顔之推が後世子孫のために著した家訓書。全七巻。内容としては中国伝統の家族道徳を重視し、教養・学問・思想・信仰から生活態度・処世法や交際術まで及ぶ、自らの具体的な体験談を挙げ、事細かく教えている。その内容が中国の士人の生活態度にも通じていたことで後世まで長く重視されている。

注 12

宇野精一『顔氏家訓』（中国古典新書 明德出版社、一九八二年）

注 13

前掲注10論文。

注 14

ここでの「玉の台」の出典は『古今六帖』巻六 三八七四「何せむに玉の台も八重葎生へらむ中に二人こそ寝め」（詠み人知らず）と見られる。

注 15

柳瀬先「宇津保物語」における老女の恋——一条北の方をめくって（『名古屋大学国語国文学』九十二号、二〇〇三年七月）同注15。

注 16

中野幸一「うつほ物語」①頭注（新編日本古典文学全集 小学館、二二七頁）

注 17

夢かたり等の描写に『伊勢物語』第六十三段「九十九髪」の面影が残り、両者の関連を論及した考察として、前掲注1の大井田晴彦論文や前掲注10の柳瀬先論文などがある。

注 18

『住吉物語』では意地悪な継母とむくつけ女は廃れた家で孤独死し、『落窪物語』においても、典葉助が打擲され、継母には四の君の結婚妨害や車争いなど二連の復讐が加えられた。

注 19

千蔭と忠こそその親子愛については前掲注3山本登朗論文に参照。学習院大学平安物語研究会編『うつほ物語大事典』（勉誠出版、二〇一三年）八四一頁「遺言」の項に参照。

注 20

『禮記』「禮運」「何謂人義？父慈、子孝、兄良、弟弟、夫義、婦聽、長惠、幼順、君仁、臣忠、十者謂之人義。」（孫希旦撰 沈嘯寰・王星賢點校『禮記集解』中華書局、一九八九年、六〇六・六〇七頁）これを受け、『顔氏家訓』治家篇第五には「夫風化者、自上而行於下者也、自先而施於後者也。是以父不慈則子不孝、兄不友則弟不恭、夫不義則婦不順矣。」（前掲注12参照）と、上の者が下の者に徳の感化を与えなければならないことを説い

注 21

『禮記』「禮運」「何謂人義？父慈、子孝、兄良、弟弟、夫義、婦聽、長惠、幼順、君仁、臣忠、十者謂之人義。」（孫希旦撰 沈嘯寰・王星賢點校『禮記集解』中華書局、一九八九年、六〇六・六〇七頁）これを受け、『顔氏家訓』治家篇第五には「夫風化者、自上而行於下者也、自先而施於後者也。是以父不慈則子不孝、兄不友則弟不恭、夫不義則婦不順矣。」（前掲注12参照）と、上の者が下の者に徳の感化を与えなければならないことを説い

注 22

『禮記』「禮運」「何謂人義？父慈、子孝、兄良、弟弟、夫義、婦聽、長惠、幼順、君仁、臣忠、十者謂之人義。」（孫希旦撰 沈嘯寰・王星賢點校『禮記集解』中華書局、一九八九年、六〇六・六〇七頁）これを受け、『顔氏家訓』治家篇第五には「夫風化者、自上而行於下者也、自先而施於後者也。是以父不慈則子不孝、兄不友則弟不恭、夫不義則婦不順矣。」（前掲注12参照）と、上の者が下の者に徳の感化を与えなければならないことを説い

た一節がある。

注23 同前掲注17、二二六頁。

〔付記〕 本稿は平成三十年度九州大学国語国文学会（二〇一八年六月九日）の口頭発表に基づいて加筆修正したものである。席間および発表後に貴重なご意見・ご指導を賜った先生方と先輩方には、心より御礼を申し上げます。

（よ こうえん・本学大学院博士後期課程）